

編 集 後 記

本号の外国語教育の研究論文を読むにつけ、語彙や文法や発音など、その外国語の基本要素を教育する理論や教授法の改善のほか、その言語知識を実践の場でどう使用するか、pragmatic competence(語用論的能力)を考慮すべきであると感じさせられる(岡田もえ子氏論文を参照)。つまり、異言語異文化の場面において、いかに自分の意図したコミュニケーションをとれるようにするか、という問題である。

では、語学教員である自分に異文化コミュニケーションの力がしっかり備わっているのか自問すると、はなはだ忸怩たるものがある。第一に、自分も若いときは誰にでも話しかけたり会話を楽しんだりすることができたが、今となっては、こちらから話しかけても相手に警戒されるか逃げられるのがオチである。昨年在外でフランスに滞在したが、中年の東洋人がたどたどしいフランス語で *Bonjour monsieur!* と話しかけても、胡散臭い顔をされるだけなので閉口した。むかしだったら、へたはへたなりに会話を楽しめたものだ。とくに、こちらのフランス語がまずいので、monsieur の発音が mouche つまり虫の「ハエ」の発音となっているらしい。これを乗り越えるためには、正確な発音はもとより、身なりをこざっぱりさせて、さも中年という格好から脱皮しなければならないのだろう。第二に、留学時代に学びとった異文化に対する経験が、時世の変化につれて適切でなくなってくる。むかしは中国語で人を呼ぶときは「同志 tongzhi」と言ったものだ。いまでは「先生 xiansheng」とか「老板 laoban(社長)」と言う。若い女性を「小姐 xiaojie」と言うと以前は教えていたが、今ではこの言葉を口にするのは夜のカフェとかでお酒を飲んでいるような感じなのだそう。こうした知識の修訂は、やはり機会があれば現地に足を運んでブラッシュアップを心がけるしかなかろう。第三に、若いときの経験から一定程度の自分の形ができあがってしまっているマンネリズムの問題。その結果、異文化では一見盛んにコミュニケーションをとれるのだが、それはいつものお決まりフレーズだけなのである。また、

異文化ではそのようにコミュニケーションをとれるのだが、逆に自文化となるとコミュニケーションがとれない、とりたがらなくなる、という現象が生じる。そうすると、自文化コミュニケーションから改善していかなければならない。実に外国語教育は修行である。(MT)

第38号編集委員会

委員長	土屋昌明
委員(50音順)	池尾玲子
	王伸子
	高桑晴子
	寺尾格
	根岸徹郎
	フリックマン, ジェフリー C.
	宮前和代